



50年前の有田 ～有田焼創業350年祭～

皆さまご存知のように、再来年の2016年には有田焼創業400年をむかえます。その年が近まりつつある中、「400年」のことを様々な情報媒体で目にする機会も増えてきましたので、町民の皆さまにとって身近になってきたのではないのでしょうか。

それでもなお「400年って何?」と置いていらっしゃる方もまた、多いのではないかと思います。そこで、一番近い時代の昭和41年に実施された有田焼創業350年祭の時、当時の人々がどのようなことを考え、何を実施したかを紹介してみたいと思います。

昭和41年当時、国内は終戦後20年が経って高度成長期に入り、右肩上がり成長を続けていましたが、有田町はこの時期、昭和40年から44年にわたり財政再建団体に陥っていました。これは上水道の施設整備、小学校校舎やプールの建設など、社会資本の整備に多額の出費がかさんでしまったことが大きな要因でした。この借金の返済も順調に進んでいた所に、さらに「42水」といわれる大水害にも襲われる中で創業350年祭の記念式典などを行い、それを契機に様々な事業が実施されました。

まず、41年10月17日に泉山石場を会場に行われた記念式典は、名誉総裁が佐賀藩本家13代目の鍋島直泰さん、総裁は池田直佐賀県知事で、会長を青木類次有田町長が務めています。350年の記念事業の一つ目として国際的な焼き物専門の美術館・九州陶磁文化館の建設がありました。ほかにも陶工碑の新設（先人陶工之碑）、有田町史編纂、窯業試験場の移転改築、有田窯業大学校の新設など、350年を契機に計画されたものが、完成するまでの年数はかかったもののほとんどが実行され、現在、その恩恵を大いに受けています。式典では、韓国・国立博物館の金載元館長や鄭文淳総領事、池田直県知事をはじめ内外から500人

が招待されました。このほかに、町内の小中学生による鼓笛隊演奏と旗行列が町中を行進し、有田工業高校や町内の小中学校生徒を対象に

県文化館永竹威館長による郷土史の講演会、児童生徒の作品展展示会、天狗谷窯跡の発掘と、その発掘責任者であった三上次男教授の講演会などが行われました。

青木町長は記念式典の折のあいさつで次のように述べています。

「次の世代で受け継いでくれるであろう四百年祭の主催者に限りない希望と期待をかけて、この有田焼創業三百五十年祭の式典を意義あらしめたい」

350年からすでに半世紀が過ぎようとしている今、事業を推進した当事者はほとんどが逝去されていますが、有田焼の存続を願う強い思いは今も息づいていますし、今に生きるすべての有田町民の方々にその期待が寄せられていると思います。

(尾崎 葉子)



佐賀県有田町

昭和41.10.17

創業
三五〇年祭
有田焼

真白い石と
きれいな水
と紅い炎で
造りあげた

↑写真は有田焼創業350年祭のポスターです。一般公募され、池田淳之助さん（泉山）の作品が入選しました。講評では「焰の芸術といわれる焼物を象徴するように、真紅の炎の中に、真白な磁肌の皿があざやかに「トチミ」の上に静かなたたずまいを見せて浮き出ているもので、動と静が調和されて迫ってくる」とあります。

(池田トヨさん寄贈)

皿 季刊 山

No.102

夏

2014

有田町歴史民俗資料館・館報

有田内山伝統的建造物群保存地区 かわら版

2016年は有田焼が創業して400年になります。町では、400年を契機に今後の有田の将来を見据えたまちづくりを目指していますが、その一環として、伝建地区を通る県道大木・有田線の「無電柱化」について、道路管理者である佐賀県と一緒に検討しています。

まちあるきで魅力を再発見

検討を行っていく過程で、まちづくりの将来をみんな考えていくことで、よりよい方向性を導きだせると考え、全3回の「有田内山地区まちづくりワークショップ」を開催することになりました。

第1回のテーマは「内山再発見」（3月8日開催）。地区住民や県、町のまちづくり関係者ら約50人が参加し、泉山の口屋番所跡広場から大樽までの約1kmのまちあるきを行い、古くからの商家や窯元が軒を連ねる表通りや、裏通りにあるトンバイ塀などを見て回りました。

まちあるきの後は、内山の景観や建物などについて、よいと思ったところ、好ましくないところなどの意見を出し合いグループごとに発表を行いました。

2回目（4月16日開催）と3回目（5月14日開催）のワークショップもそれぞれテーマを設け、内山の伝統的な行事や内山に最近できた新しいお店事情についてなど、意見や情報を出し合い、これからの暮らし方がどうあるべきかを考えてみました。



まちあるきの様子



第1回ワークショップの様子

「ありたうちやまあるき」で 有田内山の魅力を再発見

「ありたうちやまあるき実行委員会」（代表・舞原在住、田中妙子氏）では、有田内山の町並みをゆっくり散策するために「ショーウィンドウ編（平成24年3月発行）」と「中庭編（平成25年3月発行）」のマップを各1000部作成されました（いずれも佐賀県建築

士会からの助成を受けて作成）。

マップは、有田観光協会など町の主要な施設で配布されましたが、残りが少なくなったため町からの補助金を活用し、次の3種類のマップをリニューアルし増刷しました（各3000部）。

- ① ショーウィンドウ編のリニューアル版
- ② ショーウィンドウ編の英語版（日本語併記）
- ③ 中庭編のリニューアル版

今回リニューアル増刷したマップも、有田観光協会など町の主要な施設で配布しています。手に「ありたうちやまあるき」を持ち、内山の新しい魅力を発見したり、自然の景色と先人達が造りだした建築物など、有田内山らしく融合された歴史的な景観を肌で感じてもらい、思い思いの「まちあるき」を楽しんでもらいたいと思います。（池田孝）

※町文化財課は、いずれも「編集・発行の協力」という立場で携わりました。



中樽一丁目遺跡(町道部分) の発掘調査



調査区全景



土層の堆積状況



踏み臼状遺構



水槽状遺構

昨年、館報の No.100 で、都市計画道路泉山・大谷線の整備事業に伴う、中樽一丁目遺跡の発掘調査について紹介しました。その際調査区の一部で、有田では“窯焼き”と称される磁器製造の工房跡が発見され、これまで絵画や文字史料でしか知ることのできなかった工房の様子がはじめて明らかになりました。この事業に伴う中樽一丁目遺跡の調査は今年度も継続予定ですが、これとは別に今年の3月には、この道路に接続する町道建設に伴う発掘調査を実施しました。今回はその調査成果について、お知らせしておきたいと思います。

町道部分の調査は、昨年度調査した範囲に近接する場所ですが、当初は中樽一丁目遺跡の範囲には含まれていませんでした。しかし、今年度調査予定の都市計画道路の一部とは、もともと同じ屋敷地内に位置していることから、遺跡の有無を調べるため、2月に試掘調査を実施しました。

その際に、素焼き片を多く含む陶磁器類などが出土し、こし砂（陶石を砕いて水簸する際に、沈殿して残った白砂）の層や磁器用の粘土層なども発見されました。また、豆粒大の陶石の粒がぎっしり詰まった、すり鉢状の土壌なども見ついています。こうした検出状況は、昨年発見された工房跡と共通しており、江戸時代の有田では、粘土を含む陶石関連のものは窯焼きの屋敷内にしか置くことが許されていなかったため、遺跡であることは当然のことながら、工房跡であることも確実でした。

そのため、新たに中樽一丁目遺跡の範囲に追加し、3月に本調査を実施したのです。ただし、今回は一つの屋敷地の一部に過ぎず、調査面積も 100 m²ほどと狭いため、工房跡としての情報がどれだけ得られるかは、分からない状況でした。

調査は、表土を重機で上から掘削し、途中に広がる焼土層の面から、手掘りすることにしました。この焼土層は、文政十一年（1828）に、台風時の暴風にあおられ内山地区のほぼ全域が焼失した大火事の際の層で、これまでも内山の発掘調査の際には、おおむね発見されています。この焼土層からは、今回も二次的な火により酸化して赤くなった瓦などもたくさん出土しており、たしかに大規模な火災であった様子がうかがえます。

この層の下では、建物の柱穴などのほかに、確認調査の際に発見された陶石粒の詰まったすり鉢状の土壌や、こし砂の詰まった方形の土壌をはじめ、磁器生産に関連した施設跡が残っていました。すり鉢状の土壌は釉石を砕く際の踏み臼、方形の土壌の方は水簸の際の水槽（オロ）と推測され、昨年の調査の際にも同様な施設が発見されています。

これらは、18世紀末から大火時までの間に設けられた施設ですが、今回の調査地点ではそれより下の層では、明確な窯業関連の遺構は発見されませんでした。しかし、地山面では多くの土壌が検出されており、出土遺物から、工房としては17世紀中頃に成立した可能性が高いものと推測されます。

示したように、今回の調査地点と同じ屋敷地内は、今年度、都市計画道路に伴う発掘の際に調査する予定です。その成果と組み合わせることによって、今後さらに多くのことが判明してくるものと思われます。
(村上 伸之)

れきみん応援団、活動継続!

昨年4月に発足した「ありたれきみん応援団」は新たな団員も加わって総勢13名となり、今年度も継続して活動していただくことになりました。

昨年一年間の活動は45件、延べ250人という数になり、人的にも予算的にも厳しい状況の当館にあって、大変心強い存在となっています。

今年の主な活動は、企画展や子どもたちを中心とした教室など当館・当課の事業に対する支援と共に、応援団独自の活動も行おうということで、毎月1回「れきみん学習会」なるものを実施することにしました。これは、まだまだ知らないことがたくさんあるという応援団の皆さまの思いに応じて、町を歩きながらそこかしこに残る物語・エピソードを紹介していこうというものです。

例えば、「なぜ初代金ヶ江三兵衛（李参平）さんのお墓は二つもあるのか?」とか、「300年前の有田を震撼させた抜け荷（密貿易）事件の真相に迫る!」など、他所から見えたお客さまに有田焼、有田町の史実

を紹介する中で、それにまつわる多彩な話が加われば、より身近に有田を感じていただけるのではないかとという思いから提案したのですが、皆さまにご賛同いただきましたので、5月から始めました。

当然、当方もさらに調査研究などに励まねばならず、応援団の皆さまと切磋琢磨しながら、「確かな未来は懐かしい過去にある」をモットーにこれからも共に歩んでいきたいと思えます。

今年も陶器市期間中に開催された九州陶磁文化館での「九陶バザール」のお手伝いから始まった活動ですが、応援団の皆さま、一年間どうぞよろしくお願いたします。



第1回れきみん学習会の様子

探しています!! 昔の写 真

有田町歴史民俗資料館では、平成10年に「なつかしの有田」という写真展を開催し、大変好評でした。その時に町民の方々より寄贈または複製させていただいたたくさんの写真は、現在も資料館の貴重な資料としてあらゆる場面で活用しています。

しかしこの時に収集した古写真は、旧有田地区のものが多く、旧西有田地区の古い写真が不足しています。

そこで、今年度の企画展として「古写真が語るふるさとの写真展 Part II」を計画し、旧西有田地区はもちろん、新しく見つかった旧有田地区の古写真を収集し、展示したいと考えています。そのため、古い町の



山田神社の桜（昭和11年4月）※椎谷家所蔵

通りや日々の暮らしぶり、祭りの様子、窯業や農業の作業風景といった、なつかしいふるさとの写真を探しています。

皆さん、ご家庭の押し入れの奥にしまいこんだアルバムの中に、こういった写真は眠っていませんか。心当たりの方はどうぞ下記までお電話ください。

募集内容：古い写真

紙焼写真・ネガフィルム・アルバムなど
何でも結構です

連絡先：有田町歴史民俗資料館

TEL：0955-43-2678

※ご都合に合わせて、こちらから伺います。写真は一旦借用し、複製（データ化）後に現物を返却いたします。

季刊『皿山』

通巻102号（平成26年6月1日）

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL：<http://rekishi.town.arita.saga.jp>